

V. 小樽商科大学学術研究奨励事業

第5回「学生論文賞」

総 評

学生論文賞実施委員会
委員長 中村秀雄

今年度は、学部生部門に 45 編、大学院生部門に 2 編、計 47 編の応募がありました。昨年度とはほぼ同数で、学生の研究成果の発表の場として、本論文賞が安定した評価を得てきたことを示していると言えるでしょう。学部生の部では、4 年生が卒業論文を提出するケースが 8 割以上を占めています。それ以外は 3 年生からの応募でした。所属学科では商学科が 29 編と最多で、続いて経済学科から 9 編、社会情報学科から 6 編、企業法学科からは 1 編でした。大学院生の部では、ビジネススクールと現代商学専攻の学生各 1 人からの応募がありました。

論題は労働問題、ダイエット、学業、資本市場、電子マネー、ツイッター、地域活性化、路線バス事業、大学ランキングなどあらゆる分野にわたり、商大生の社会的関心の広さを示していました。

プレゼンテーションによる第 1 次審査には延べ 255 名の教員が当たりました。前回には延べ 360 人の教員の参加がありました。せっかく学生の間にも本活動が定着してきたのに、教員側の参加が前年を下回ったのは、少し残念なことです。与えられた時間の中でいかに論文の内容と研究の方向性を上手に伝えられるかがポイントです。この段階で問題点をはっきり示し、解決への展望を示せなかった研究は、次に進むことが難しいと言えます。29 編が第 1 次審査を通過し、第 2 次審査に進みました。第 2 次審査では、昨年とほぼ同数の延べ 52 人の教員が提出された論文の審査を行ないました。論文形式、アプローチ、方法論、テーマ設定、論理構成、独創性、そして何より結論の妥当性などの点から総合的な「質」が評価されます。

厳正な審査の結果、「ヘルメス賞」1 編、「優秀賞」5 編（学部 4、大学院 1）、「奨励賞」13 編（学部 12、大学院 1）が選ばれました。また優秀なプレゼンテーションを獲得した論文に授与される「ベスト・プレゼンテーション賞」は、「優秀賞」対象論文の 1 つが獲得しました。特筆すべき論文に与えられる「特別賞」は今年も該当がありませんでした。これで 3 年間続いて「該当なし」ということとなります。来年度に期待したいところです。

賞を与えられた論文には、「定説」に疑問を抱き、何かが違うのではないかと考え、解決方法を模索したり、新しい視点から問題を見直してみる、というものが多かったように思われます。これはとても大事なことだと思います。また「そうなるに決まっている」と信じ

られていることを、本当にそうなのかどうか試してみて、その正しさをきちんと証明しなおす、というものもありました。このように自分の足下を今一度見直してみることも、若い諸君には価値あることです。「ヘルメス賞」を得た論文は、現在の研究成果を踏まえて、自分達の次の具体的な課題まで提示していました。このような将来につながるような研究姿勢は、高く評価出来ることだと思います。一方、取り立てて見通しを立てずに現況を分析して述べるもの、疑問を持ったものの自分なりの仮説を立てずに、ただ資料を調べたに留まるものは、研究としては少し物足りない判断せざるを得ませんでした。入賞した学生も惜しくも選に漏れた学生も、審査担当者からの評価フィードバックを、ぜひ今後の為に役立てていただきたいと思います。

本年度もご多忙中、審査にご協力いただいた教員の方々には、厚く御礼を申し上げますと共に、来年も是非ご協力いただくようお願いいたします。

最後になりましたが、本事業の実施に当たっては、株式会社北洋銀行様より、例年と変わらぬ多大なご支援を頂戴いたしましたので、特記して感謝の意を表します。

小樽商科大学 学術研究奨励事業第5回「学生論文賞」結果

○学部学生の部

ヘルメス賞	「パレート分布によるリスク計測の優位性」	浜谷 崇 中西 健太郎
優秀賞	「早期離職率を下げるためには」	中井 菜摘 東間 成美 西田 峻 南山 貴彦 山本 沙弥
優秀賞	「新興証券市場における中堅・中小企業と環境経営」	大竹 佑亮
優秀賞（ベスト・プレゼンテーション賞）	「有給休暇と労働生産性の関係」	田中 巧 清野 真智子 塚谷 詠里 松崎 奈史生
優秀賞	「日常生活でダイエット？ ～履物の違いによる消費カロリーの違い～」	木下 紗貴 一家 ひとみ 大須田 千晶 澤田 美樹 椿万 里奈 平島 歩美 平島 希美 三浦 茉那美
奨励賞	「サービス業における時間主導ABCの意義」	岡田 龍哉

奨励賞	「学生が望む『学校教材としての電子書籍の導入』について」	下村 美和
奨励賞	「食品通信販売のマーケティング戦略」	鈴木 健之
奨励賞	「観光地に対する事前評価と事後評価の関係性」	高橋 亮太
奨励賞	「不祥事対応と経営戦略 ―松下の事例を中心として―」	平田 淑倫
奨励賞	「小樽市における路線バス事業の現状と課題」	中川 慎也
奨励賞	「じゃらんの「新・ご当地グルメ」が地域の活性化にもたらす影響」	八木 皆実
奨励賞	「勤続年数をのばすためには」	遠藤 真彩 今中 沙紀 桑名 智子 福田 翔 吉田 和希
奨励賞	「ブランドによる競争優位の構築と展開 ―資生堂・カネボウのブランド戦略―」	室松 麻衣子
奨励賞	「論点のすり替えの自動抽出の手法に関する研究」	三浦 工弥
奨励賞	「コンビニエンスストアにおける電子マネーの分析 ―電子マネー導入目的と戦略の整合性―」	土屋 大地
奨励賞	「地方議会会議録のWEB公開システム公開に向けての調査報告」	永坂 文乃 前多 大輔 葦原 敏文 窪地 由恵 志賀 千鶴

○大学院生の部

優秀賞	「原価企画を成功させるサプライヤー・マネジメント」	那須 夕希子
奨励賞	「テレビ広告におけるブランド構成要素の露出優先順位決定問題―ブランド構成要素の印象度調査―」	高澤 慧輔

副賞 ヘルメス賞 10万円 優秀賞 5万円 奨励賞 1万円
ベスト・プレゼン賞 1万円

各論文講評（優秀賞以上）

（学部生の部）

ヘルメス賞

「パレート分布によるリスク計測の優位性」浜谷 崇／中西 健太郎

リスク評価で想定する確率法則としては正規分布が往々にして採られる。これに対して、本論文では、広汎なクラスの確率分布に対して値が極値を超える時の条件付き確率分布が一般化されたパレート分布に収束するというグネジェンコの定理に基づき、米国株価指数の VaR や ESF を評価している。その結果は従来方式の結果とは大きく異なるものであり、パレート型リスク指標を超える可能性はほぼ無視できるものとなる。これは本論文の主たる成果であり、多くの資産価格形成メカニズムを包含する点でかなりの一般性を持っている。もちろん金融機関や金融当局が新たに提案されたリスク指標を実際に採用する誘因を持つかどうかはまた別の論点である。また、中心極限定理で満たすべきどの仮定が崩れて市場価格形成の正規性が失われるのかという点も理論的には重要である。分布の非正規性自体は各種 ARCH モデルが普及した現在、もはや陳腐であろう。評者の胸の内にはこのような問題意識がなお残っているのだが、これらが本論文の意義を損なうものではない。本論文で示された著者の力量はそれ自体として極めて高く評価されなければならない。

優秀賞

「早期離職率を下げるためには」中井 菜摘／東間 成美／西田 峻／南山 貴彦／山本 沙弥

この論文は、新卒労働者の早期離職率を、新卒労働者の出身大学の偏差値序列との関連で説明することを試みている。筆者達の仮説は、早期離職率の高い企業では、採用された新卒労働者達の学歴序列が平均的に低いのではないかというものだ。

学歴序列の低さは、労働市場における競争上の不利を意味し、それは不本意な企業に就業する確率の高さを招来する。それゆえ偏差値序列の低い大学出身の新卒労働者の多い企業では早期離職率も上昇してしまう、というのが仮説の内容である。

筆者達はこの興味深い仮説について、ある企業が雇用する新卒労働者の偏差値序列の平

均を指標化した「企業偏差値」という変数を独自に考案し、各産業についてこの「企業偏差値」と離職率の相関の実証を試みている。

このように独自に仮説を立て、オリジナルな変数を考案する創意や、問題関心や分析手法、実証結果を紹介する明快に整理された論文構成は、優秀賞に値する優れたものであると考えた。

「新興証券市場における中堅・中小企業と環境経営」大竹 佑亮

本論文は、昨今注目度の高まっている環境経営について、それに積極的に取り組む中堅・中小企業の業績パフォーマンスに関する分析を行い、中堅・中小企業においても環境経営に取り組むことが業績上プラスであることを示したものである。

CSR や環境経営については、それらが業績や株価パフォーマンスに与える影響に関してさまざまな分析結果が存在し、いまだ定説は存在しない。そのような中、先行研究の乏しい中堅・中小企業を研究対象として、当分野の幅を広げたことは評価に値する。また、これから環境経営にどのように取り組むべきかを悩む中堅・中小企業に指針を与えるものとしても価値が高いと考えられる。分析手法についてはやや改善の余地はあるものの、仮説に立脚して一つずつ丁寧に行われた分析とその結果を論理立ててまとめあげた構成で、卒業論文として十分に優れた論文であると評価する。

「有給休暇と労働生産性の関係」田中 巧／清野 真智子／塚谷 詠里／松崎 奈史生 (優秀賞／ベスト・プレゼンテーション賞)

本論文では、国内の企業における有給休暇の取得率と業績との関連を、相関係数による分析と回帰分析の方法を用いて検証し、企業側が有給休暇の取得率を向上させることの意義について明らかにしようと試みている。論文では先行研究について、上場企業では「有給休暇の取得率の向上が労働生産性に寄与する」という仮説が成立することを、データを用いて示しているが、業種毎に成立するかは示されていない、と指摘している。このことを踏まえ、論文では分析対象を大企業にした上で、業種を区別した場合としない場合について、「有給休暇の取得率が高まることで、労働者の創造性が発揮され、労働生産性が上昇する」という仮説を立て、有給休暇の取得率と労働生産性との関係を検証している。分析の結果、いずれの場合も明確な関係は認められず、この仮説は成立しないという結論を導いている。丁寧なデータ分析の結果から、取得率の向上の意義について慎重な立場を示した点に、論文の貢献がある。

「日常生活でダイエット？ ～履物の違いによる消費カロリーの違い～」木下 紗貴／
一家 ひとみ／大須田 千晶／澤田 美樹／椿万 里奈／平島 歩美／平島 希美／三浦
茉那美

本論文の優れている点は誰もが関心のあるテーマを選択した点にあると思われま
す。日常生活の必需品に結論を導くなどは作者の優秀性を反映しています。履物と消費カロ
リーを結び付け、ダイエットに有効との結論は新鮮味があります。本論文を読んだ人は明日に
も試してみようと思わせる程本論文はインパクトのある内容を含んでいます。

近年のメタボ健診の導入により、従来以上にダイエットの関心は高まっています。ダイ
エットに挑み、失敗した経験を持っている人も多いと思われます。なぜならダイエットは
自己の食欲との戦いで、鉄のような強固な精神力を必要とするからです。では、容易に成
功するダイエット方法はないのでしょうか。本論分は明快な回答を私たちに示してくれま
した。それは、履物を換えればいいのです。極めて簡単な方法ではありませんか。

今後はさらに研究を重ね、ダイエットに極めて有用なオリジナルシューズを開発するこ
とを期待しています。

大学院生の部 優秀賞

「原価企画を成功させるサプライヤー・マネジメント」那須 夕希子

本稿は、部品の調達原価削減のために、ダイハツ工業と日産自動車が生産業者に対して
とった方法が正反対であったことから、部品の性質を意識しながら製造者は上流工程で生
産業者をどのように管理すべきか、を考察した。そのため生産業者を分類する。分類軸自
体は既知のものであるが、貸与図、承認図、委託図という部品設計図に関する軸と、少数
の生産業者間で有効競争をさせるか、または特定の業者に一括して任せるかという競争の
程度による軸である。本稿は2つの軸を組み合わせ、6つの組合せを3つの範疇に理論的に
絞り込み、各範疇に適した管理手法を示した。結論として、部品の価値連鎖の均一的な管
理ではなく、部品の性質に応じて強調すべき価値連鎖の輪を特定することが優れた生産
業者管理であるとしている。また、対象事例は部品の情報を製造者が持っているのか、生
産業者も持っていないのかという状況の相違で説明がつくとしている。本稿のような事例研
究では、応用可能な分析法の提示とそれによる事例の説明が求められるが、その点で優秀
賞に適したものであると言えよう。

審査員一覧

1次審査員一覧 (50音順)

相内 俊一	穴沢 眞	石川 業	石崎 香理	石田 三成
今本 啓介	海老名 誠	大津 晶	奥田 和重	乙政 佐吉
加賀田 和弘	堺 昌彦	佐山 公一	澤田 芳郎	菅原 照夫
角野 浩	辻 義人	寺坂 崇宏	中浜 隆	中村 秀雄
沼澤 政信	篠本 智之	深田 秀実	福重 八恵	プラート カロラス
南 健悟	劉 慶豊	和田 健夫	和田 良介	

2次審査員一覧 (50音順)

相内 俊一	阿部 孝太郎	石川 業	石黒 匡人	石田 三成
伊藤 一	今本 啓介	江頭 進	海老名 誠	大津 晶
大矢 繁夫	乙政 佐吉	加賀田 和弘	金 鎔基	近藤 公彦
齋藤 一朗	堺 昌彦	菅原 照夫	杉山 成	高宮 城朝則
辻 義人	出川 淳	寺坂 崇宏	渡久地 朝央	中村 健一
中村 秀雄	行方 常幸	西山 茂	沼澤 政信	篠本 智之
花輪 啓一	深田 秀実	福重 八恵	船津 秀樹	プラート カロラス
保田 隆明	南 健悟	持田 泰昭	芳澤 聡	劉 慶豊

第1次審査 (11月17日)



表彰式 学長を囲んで (3月18日)

